

Immanuel Kant "Kritik der reinen Vernunft"

カント『純粋理性批判』

第三章 理想 (Ideal)、承前

第五節 神の現実的存在に関する宇宙論的証明

1 (51)／神の現実的存在に関する実体論（存在論）的証明の不可能の確認

神の現実的存在の証明を、実体論（存在論）的証明に求めようとした者は、任意に設定された理念から、それに対応する対象そのものの現実的存在をひきだそうとするような不自然な行程を経て、スコラ的空論の復活を齎しただけであった。これらの人々は、必然的なものという概念を、「最も実在的な存在体」という理念のうちに求め得ると信じたのであるが、彼らの理屈は、実は全く別の方面から、それが実際に存在することが確信されていた「必然的存在体」というものの説明に、この出自の異なる概念を適用し、更にこの概念から現実的存在の必然性を導きだそうとしたのである。

2 (52)／宇宙論的証明

今後われわれ（カント）が研究しようとしている「宇宙論的証明」も、絶対的必然性と最高実在性との結合を保持しようとするものであるが、前節で取り上げた実体論（存在論）的証明が最高実在性から現実的存在の必然性を推論しようとしたのとは異なり、一つの存在体のあらかじめ与えられた無条件的必然性から、この存在体の無際限な実在性を推論しようとするものであり、これは思弁的悟性にとって、納得し安い、自然な推論の仕方であり、自然的神学のあらゆる証明に対しても第一の基本的要点を示すものである。ライプニッツはこの推論の基本的要点を「世界の偶然性からの証明」と呼んでいた。

3 (53)／宇宙論的証明の径庭①

++ もし何ものかが実際に存在するとすれば、端的必然的な存在体もまた実際に存在しなくてはならない。しかるに少なくともわたくし自身は実際に存在する。ゆえに絶対的必然的存在体は実際に存在する。(A-p.604,B-p.632)

ここで小前提（私たち自身の存在）は経験を含み、大前提（何ものか *Etwas* の存在）は経験一般から必然的なものの現実的な存在への推論を含んでいる。これは、原因性を超越論的自然法則と誤認したことに基づいているのだが、一先ず、これは経験から出発するという点から、実体論（存在論）的ではないと言える。また、経験の対象とするものが世界 *universus* と呼ばれることから、この証明は「宇宙論的証明」と呼ばれる。

4 (54)／宇宙論的証明の径庭②

++ 必然的存在体はただ一つの仕方によってのみ規定されることができる。すなわちあらゆる可能な対立的述語（肯定と否定）に関して、ただそれらのうちの一つ（肯定）によってのみ限定されることができるのである。したがって必然的存在体は自己の概念によって徹底的に限定されねばならない。しかるに物をア・プリオリに徹底的に限定するような概念は、一つの物についてただ一つしか存しない。すなわちそれは最も実在的な存在体（*ens realissimum*）という概念である。したがって最も実在的な存在体という概念こそ、それによって必然的存在体が思惟されうるところの唯一の概念であり、換言すれば、最高存在体は必然的に実際に存在するのである。

(A-p.605～6,B-p.633～4)

5 (55)／宇宙論的証明における思弁的理性の詭計

この宇宙論的論証を操る理性は、「純粋理性」と「経験的立証」とを、この証明に関る二人の証人として仕立てあげ、これらを抛り所に、この証明の正当性を揚言しようとする。

しかし、先ずこの二人の証人の内、実際に存在するのは純粋理性の証人ただ一人であり、経験的立証という証人は、純粋理性を変局したものであるに過ぎない。この証

明は、アプリオリな純粋概念に全幅の信頼を置く実体論（存在論）的証明との違いを強調するために、経験を足場にして見せるが、「必然的存在体」の性状を説明するという肝心な点では、経験的論拠は廃棄され、理性はこの「必然的存在体」が見出されるのは、唯一「最實在的存在体」という概念の中のみであるという態度を取る。ここでは、だから、最高の實在性を持つ存在体という概念が、現実的存在における絶対的必然性の概念を完全に充足するという、出発点において斥けられた筈の実体論（存在論）的推論が取り入れられ、根拠とされているのである。

従って、ここで宇宙論的証明としていわれているものも、その証明力の中枢に位置しているのは、概念からする実体論（存在論）的証明なのであり、出発点に据えられた経験は、ただ口実として用いられたようなものなのであり、本来この論証においては無用のものである。

絶対的必然性という概念は、本来、純粋概念の内にのみ、その絶対的必然的存在体を可能とする条件を見出せるかどうかという問いを成立せしむるのみであり、このように、単に概念に現実的存在体という概念を連結するような証明は、絶対的必然性を伴う明確な事物を示すことはできない。

6 (56)／推論における欺瞞の発見方法

推論における欺瞞を見出すには、それが規則を忠実に踏んでいるかどうかを吟味すればよい。判断における、主語（前提）と述語（結論）の换位の吟味。

7 (57)／宇宙論的証明の虚偽・論点相違の虚偽（ignoratio elenchi）

8 (58)／宇宙論的証明における弁証的技術の摘出

9 (59)／宇宙論的証明における弁証的技術の引証

- (1)偶然的なものから原因へと推理する超越論的原則の誤用
- (2)感性界において第一原因を推論する推理の経験への拡張
- (3)系列の完結に関する理性の誤った自己満足
- (4)結合された實在性という概念形成における、論理的可能と超越論的可能との混同

10(60)／宇宙論的証明の不可能

宇宙論的証明が、その始発点において目指していたのは、必然的存在体が現実存在するということを、アприオリに単なる概念から証明することを回避すること、つまり、実体論（存在論）的証明を用いないことであった。

しかし、われわれ（カント）としては、これは全く不可能なことであると言えない。なぜなら、実体論（存在論）的証明を回避しつつ、必然的存在体が現実存在することを証明しようとするのには、そこで推論しなければならない、現実的な存在の必然的条件が、既に証明されているという、覆うべくもない論点先取が露呈しているからである。

推論一般において、それを欠いては存在体が絶対的必然的ではなくなるような消極的条件（必須条件 *conditio sine qua non*）を求めることが行われる訳だが、この宇宙論的証明においては、その条件が唯一存在体の中にのみ見いだされるのであり、この唯一の存在体は、自己の概念中に、絶対的必然性のために必要とされる一切を含んでいなければならない、だとすると、この必然性はアприオリに推論することが可能であり、なおかつ「この概念（最高實在性）の属するものは端的に必然的である」という倒立した推論をも可能ならしむる筈である。それができないということは、端的に、この宇宙論的論証が不可能であるということを意味するのである。

なるほど、最高存在体というような概念は、事物を内的に限定するために提出され得るあらゆるアприオリな問題に回答を与えるようなものであろう。しかし、この理想は、自分自身の現実的存在に関する問いに答えることや、必然的存在体とみなされる事物を明示することはできないのである。

11(61)／実践理性的倫理の闕？

12(62)／超越論的理想の課題

超越論的理想の全課題は、絶対的必然性に対応する一つの見いだす（実体論（存在論）的証明）か、もしくは、何らか一つの物の概念に対応させその絶対的必然性を見いだす（宇宙論的証明）か、のいずれかに帰着する。そして、理性が指向するのは、この内一方が可能であるなら、他の一方も可能であるということである。なぜなら、理性が端的に必然的なものとして認識するのは、その概念において必然的であるもののみであるからである。しかし、この両者の統一は、今まで見てきたように、われわれの悟性能力を超越したものである

13(63)／理性の深淵

理性がもたらすのは、このような問いの前での底知れぬ動揺である。思弁的理性は、それを抑えることも、堪え忍ぶこともできないような問いの前に、われわれを立たしめる。

14(64)／理想の座

諸現象の根底に存する超越論的客体や、なぜわれわれの感性が他の最高諸条件ではなく、この条件を有するか理由はわれわれには探求できないままである。これらは、ことがら自身は与えられてはいるが、それを洞見できないようになっている。しかし、純粹理性の理想が探求できないという訳にはいかない。理想は思考の対象としてここに差し出されているのであり、考えられうる対象して探求できないものではないのである。理想は理性の本性のうちにその座と解決とを見いだされるべきものである。

必然的存在体が現実存在しているということを超越論的に証明する場合、
つねに現われる弁証的仮象を見出し、かつ説明すること

15(65)／超越論的仮象の原因

今までに述べられた二つの証明はいずれも超越論的なものであり、経験的諸原理から独立に試みられたものである。では、この超越論的証明において、必然性の概念と最高実在性の概念を結合せしめ、理念にしか過ぎないものを、理想として実在化し、実体化する、弁証的ではありながら自然な仮象の原因となるものは一体何なのであろうか？

だが、これまでの論証により、このような問いに超越論的証明で答えることは不可能であることがわかった。

16(66)／理性の主観的原理としての偶然性と必然性

17(67)／世界の外の絶対的必然性

18(68)／最高存在体の位置

19(69)／理性の統制的原理としての最高存在体

第六節 物理神学的証明の不可能なゆえんについて

1 (70)／第三の手段としての物理神学的証明

前節までにおいて、神の存在を証明する試みとして、「物一般という概念」からする実体〔存在〕論的証明と、「現実的存在一般の経験」からする宇宙論的証明とが吟味され、それぞれの試みにおいてその不可能性が露呈された。だとすると、なお残されているのは、「一定の経験、したがって現存する世界の諸物に関する経験、その性状や秩序が、われわれを助けて確実に最高存在体の現実的存在を確信せしめることができる論拠を与えないかどうか」(A-p.620,B-p.648)という「物理神学的証明」の可能性を試みることのみである。

そして、これさえも不可能であることが判明すれば、超越論的理念に合致するような存在体の現実的存在を、思弁的理性から証明すること自体が、総じて不可能であるということになる、とカントはいう。

2 (71)／経験と理念

前段のような問いを問いつつ、しかしカントは、この問いの中に、既に問題の回答が明瞭なかたちで呈示されていることを指摘している。それは理念と経験との本源的不一致ということである。理念の理念たる特質とは、いかなる経験もそれに合致しえないということであり、本来無制約なものとしてある理念一般にもまして、「必然的にして一切充足的な根源的存在体という超越論的理念」は、経験的なものを遥かに高く超絶しているのであり、このような概念を充たす何らの資料をも経験の中には求めえず、又、それが理念としてあまりに高さものであるが故に、人々をして、いたずらに制約されたもののなかに無制約者を求めさせることとなるのである。

3 (72)／認識の系列と最高存在体

仮に、最高存在体〔神〕を諸制約の連鎖の中に置いてみると、最高存在体が諸制約の系列の中の単なる一項と斉しいものとなってしまい、更に最高存在体より高次なものを求めなければならないようになってしまう。これとは逆に、最高存在体をこの諸連鎖から切り離された叡智的存在体として、自然原因に包括されないものとしたらど

うであろうか。この場合、理性にはいかなる最高存在体に至る途も残されていないのは明らかであろう。認識一般は、ただ感性界の諸対象に関して意味を有するのみなのであるから。

4 (73)／経験と最高存在体

かくして、最高存在体を世界の諸物に関する一定の経験の系列から導きだそうとする「物理神学的証明」は、最高存在体が、経験の連鎖の中には見出しえないことを認める。しかし同時に、結果と原因、目的と手段、生起と消滅といった無数の合法則性を見出し、無限に存在する偶然者〔自分自身で自分の現にある状態に到達したのではない者〕を見出す。そしてこの証明は、この偶然者の外に、それ自身は根源的かつ独立で存在してこれらの偶然者を支え、同時にこれらの偶然者の存続を保証する何ものかが想定されないとするなら、一切は悉く無の深淵へと沈み落ちてゆくのみではないか、と考える。これらの偶然者は、原因性に関して既に究極最高の存在体を必要とする、というのであり、この究極最高の存在体を一切の可能なものの上におくことに何の妨げがあろうかと強弁するのである。

++ このような〔最高存在体の〕概念は原理をなるべく少なくしようとするわれわれ〔物理神学的証明〕の理性の要求にかなうものであり、それ自身何らの矛盾にも陥らず、経験内部における理性使用の拡張に対してすら、このような理念が秩序と合目的性との指導を与えることによってよく効果をあげるものであり、このような概念が決定的に経験と背馳するようなことは、経験のいずこにも見いだされないのである。(A-p.623,B-p.651 : [] 内は引用者)

5 (74)・6 (75)／物理神学的証明の一般的効能

一見、カントはこの物理神学的証明に対して好意的である。

この証明は、古くからある最も明瞭な常識によく合致したものであり、われわれの自然認識を拡大させることに努め、最高創造主に対する信仰を増強せしむるのに役立つ、といった点で敬意をもって称されるに値する。

従って、この証明の信望を傷つけることは無益であり、理性はこの証明によって、ついには最高にして無制約的創造者に高まるのであるから、と。

7 (76)／物理神学的証明へのカントの反論

++ 物理神学的証明は、最高存在体の現実的存在をとうていそれだけでは説明できるものではなく、この欠陥の補いはつねに実体〔存在〕論的証明に（これに対しては物理神学的証明は単にその序論として役立つにすぎない）委ねられねばならず、したがって実体〔存在〕論的証明はつねに、人間性の看過することのできない唯一可能な証明根拠（いやしくも思弁的証明が成立するかぎり）を含むものである。

(A-p.625,B-p.653)

8 (77)／物理神学的証明の要点

- (1) 世界にはいたるところに、一定の意図に従い、大いなる知恵によって完成された一つの秩序の印がみられる。
- (2) 世界の事物にとってはこの合目的な秩序は、外から与えられたものであり、単に偶然にこれらの事物に加わったものである。
- (3) 従って、ここに単に産出によって盲目的に働く全能な自然としてでなく、自由による叡智として世界の原因でなければならないような原因が実際に存在する。
- (4) これらの原因の統一性は、世界の諸部門の交互関係の統一によって推論され、更にそれ以上の局面においては、あらゆる類推の原則に従って蓋然的に推論される。

9 (78)／物理神学的証明におけるおのずからなる理性の詭弁

カントは、ここで物理神学的証明における「おのずからなる理性」の詭弁には、鋭利な超越論的批判の立場からは許しがたい推理の仕方が行われていると難じつつも、おのずからなる理性を、おのずからなるものであるとして難ずることはできないとして、これを原因と結果という観点から、「もし理性が自分の知っている原因性から、自分の知らない曖昧で証明できない説明理由へと移ってゆこうというのでは、理性はみずからその責めを負うことはできないであろう」(A-p.626,B-p.654) と言うに留めている。

10(79)／形式と質料

この物理神学的証明における推論によれば、これらの自然的組織が持つ合目的性と斉合性とは、単に形式の偶然性を証明するもので、世界の实体としての質料の偶然性を示すものではないことになる。何故なら、質料の偶然性を証明するためには、「世

世界の事物がその実体の面からしても最高叡智の産物でないとすれば、それらの事物それ自身が、一般法則から見て、このような秩序と調和とを持つことができないこと」(A-p.627,B-p.655)を証明するように要請される筈だからである。

だからカントは、物理神学的証明が示しうるのは、自分の加工する素材によって制限を受ける世界建築者（形式を付与する者）であり、それ自身の理念に一切が従属する世界創造者（質料を造った者）ではないといっている。

11(80)／完全性の概念

このように物理神学的推論は、秩序と合目的性から出発し、それに適応した原因へと進むべきものである。だからここにおける原因の概念においては、一切充足的存在体としての完全性を有する存在体の概念以外のものはない。

にも拘らず、この推論が驚嘆してみせる、卓越性を示す述語は、観察者が、自分自身や自分の理解力を、その対象と比較し、対象の大きさを相関的に示したものにほかならず、何ら明確な概念を与えるものではない。物それ自体が何であるかは、ここでは述べられてはいないのである。

12(81)・13(82)／神学の原理と絶対的総体性との間の亀裂

かくして物理神学的証明も、最高存在体の現実的存在を何ら明らかにするものではないことが判明した。それは、世界の最高原因に関して、何ら明確な概念を与えるものではない。経験によっては、世界の絶対的総体性に参入することはできないのである。しかし、人々は一般に物理神学的証明によって、このかくも大きな亀裂を超えようとしている。そこにはいったいどのような手段が残されているのか。

14(83)／世界の偶然性と純粹理性

人々は、世界創造者の巨大さや叡智、威力等に瞠目し、それ以上進めなくなった地点で、この経験的論拠を放棄する。そして、最初に世界の秩序と合目的性から推論された世界の偶然性へと赴く。人々は、ここでこの偶然性のみをてこに、超越論的概念によって、端的現実的存在へと進み、第一原因が存在しなければならぬ、という絶対的必然性の概念から規定され、規定する端的必然体の概念、すなわち、一切を包括する概念へと辿りつくのである。

従って、物理神学的証明は行き詰まり、その困惑から宇宙論的証明へと飛躍し、結

果、仮装した実体〔存在〕論的証明として、結局はその意図を純粋理性の内部で完遂したのみに過ぎないことになるのである。

15(84)／超越論的証明としての物理神学

結局、経験を前提とした物理神学も、純粋理性の産物である理想に到達するためには経験以外の足場によっているのであるが、彼らが未だにそれを認めようとしないのはおかしいことである。

16(85)／実体〔存在〕論的証明の可能性

第七節 理性の思弁的原理に基づくあらゆる神学に対する批判

1 (86)／理神論者と有神論者

神学を根源的存在体の認識とするなら、神学には単なる理性に基づく神学（*theologia rationalis* 合理的神学）と啓示に基づく神学（*theologia revelata* 啓示神学）がある、とカントはいつている。そして、理性に基づく合理的神学には、その対象を単に超越論的諸概念（*ens originarium* 本源的存在体、*ens realissimum* 最実在者、*ens entium* 一切存在体の存在体）を媒介として、純粋理性によってのみ考えるもの〔超越論的神学〕と、自然（心の本性）からとられた概念によって、その対象を最高叡智者ともの〔自然的（*natürlich*）神学〕とがあるという。

- | | |
|---------------------------------------|------------------------|
| ・ ・ <i>theologia rationalis</i> 合理的神学 | ・ ・ 超越論的神学：理神論者(Deist) |
| 神学 ・ | ・ ・ ～超越論的諸概念を媒介 |
| ・ ・ <i>theologia revelata</i> 啓示神学 | ・ ・ 自然的神学：有神論者(Theist) |
| | ・ ・ ～自然（心の本性）を媒介 |

この際、理神論者とは、超越論的神学のみを容認する者であり、彼が最高存在体というときに表象しているのは、単に「世界原因」であり、一方、自然的神学をも認める有心論者が表象しているのは世界創始者である。

2 (87)／宇宙論的神学と実体〔存在〕論的神学

更に、前節までの探求に依拠するのであれば、超越論的神学のうちには、根源的存在体の現実的存在を、経験一般から類推しようとする宇宙論的神学と、経験の助けを借りずに、単なる概念によって認識できるとする実体〔存在〕論的神学とがある。

3 (88)／物理神学と道德神学

一方、自然的神学では、この世界の秩序と統一とから、世界創始者の特質とその現実存在とが推論されるので、世界には自然と自由とが想定されねばならないことになる。従って、自然的神学は、一切の自然の秩序と完全性との原理として最高叡智者を捉えようとする「物理神学 (Physikotheologie)」か、一切の道德的秩序と完全性の原理として最高叡智者を捉えようとする「道德神学 (Moraltheologie)」かのいずれかに分類される。

4 (89)／神学と信仰

これらの神学における理神論者と有神論者を、信仰という見地から眺めてみるならば、理神論者においては、神に対する一切の信仰が拒否され、もっぱら根源的存在体或いは最高原因の主張のみを許すということができるだけである筈だが、必ずしも、理神論者は神への信仰の否定を主張してはいない。だから、理神論者を信仰を持たない者と非難することは穏当ではない。だから次のように言うべきであろうとカントはいう。

++ 理神論者は神を信ずる。しかし有神論者は生ける神 (summa intelligentia 最高知性) を信ずる。(A-p.633,B-p.661)

カントは、ここから理性の最高存在体に至ろうとする試みを可能とする源泉を探求しようといっている。

5 (90)／理論的認識と実践的認識

カントは、ここで、理性の働きを、現に在るところのもの (was da ist) を認識する理論的認識と、現に在るべきもの (was dasein soll) を表象する実践的認識とに分けて説明することによって、理性認識の源泉を指し示そうとする。カントはこれを、

制約の要請と仮定として説いていく。

「或ものが在る」ことや、「或ものが生起すべきである」ことにしても、これらを制約されて在る、又は在るべきものである、としてみれば、ここに制約の二様の形態が、一方は或る明確な制約が端的に必然的であるとして、要請されている（*per thes-in* 主張によって）制約として、他方は単に任意かつ偶然的に前提されているとして、仮定されている（*per hypothesin* 仮定によって）制約としてあることになる。

そして、実践的法則（道徳的法則）の存在から類推されるのは、それが存在するということは、その拘束力の存在が可能であるということであるから、その可能な条件として、ここで必然的であるとされる現実的存在は要請されたものでなければならないということになる。何故なら、この明確な制約を導出する推論の出発点である被制約者は、それ自身が端的に必然的なものであるとして、ア・プリオリに認識されるものであるからである、とカントはいうのである。

だから、最高存在体の現実的存在の要請は、将来『『実践理性批判』において〕示されるであろう、と予示されるのである。

6 (91)・7 (92)／理論的認識の思弁性

単に現存するものが問題である場合、経験において与えられる被制約的ものは、同時に常に偶然的なものであると考えられるので、この被制約的なものに所属する制約は、経験によっては、端的必然的なものとは理解されず、むしろ理性の必要や、ア・プリオリに恣意的な前提として用いられるに過ぎない。

理論的認識は、このように、われわれがいかなる経験においても到達できない対象や対象の概念を目指す傾向性を内包しているのであり、この場合の理論的認識は思弁的であるといえる。そしてこれは自然認識と対立せしめられるものである。

8 (93)／思弁的認識

このような思弁的認識においては、生起することから、それを結果として原因へと推論する自然認識の原則は全く省みられない。ここでは、原因の概念も、偶然的な概念もともに、全ての意味を見失ってしまうのである。

9 (94)／理性の思弁的使用

世界における物の現実的存在からその原因を推論する仕方は、自然的理性使用には

属さず、思弁的理性使用に属する。自然的理性使用は、物の生起や状態を経験的偶然性として何らかの原因に関係せしむるが、実体自身が現実的存在としては偶然的であることを認識にもたらすのは、思弁的理性の行なうことである。又、世界の形式が問題であるとしても、そこから世界とは全く別の原因へと推論を進める場合、この推論も思弁的理性の判断としてもたらされるものである。何故なら、この対象は全く可能な経験の客体の埒外にあるからである。そして、こうなってしまうと、意味さえない原因性の原則はその使用を破砕されてしまうことになる。

10(95)／理性神学の決定不能性と物理神学的証明の位置付け

ここに至ってカントは、道徳法則を基礎に置かない、あらゆる理性神学の破産を宣告する。何故なら、理性の思弁的使用は神学に対して無意味しかもたらさず、理性の自然的使用は如何なる神学へも導くことはしないからである。しかし、道徳法則を基礎とする理性神学については、ここでは言及されない。ここでは僅かに、物理神学的証明が、思弁を直観と結び付ける作用により、悟性に神学的認識に至る自然的方向を与えることがいわれるのみである。

11(96)／超越論的問題構成と神学

結論としては、超越論的手続きをもってしても、単なる思弁的理性の神学には何もかももたらすことはできない。しかし、ここで問題は総合的にわれわれの認識の拡張を促している。この要求、何らかの経験と同等ではありえない単なる理念に対応すべき存在体を現実的存在へと拡張せよ、という要求が、不可避の問題構成として超越論的神学を要請するのである。

12(97)／独断的神学者達

13(98)／理性認識の純化作用としての実践理性批判

14(99)／理性の査察官としての超越論的神学

15(100)／理性の思弁的使用においては単なる理想に留まる最高存在体